バングラデシュ･ダッカ大学レポート

- ダッカ大学には教え子のアーサン（教授）がいる。ダッカに最初滞在したのは**1997**年である。昨年、久しぶりに訪れた。市街はきれいになったが**old city**はまだまだである。アーサンと同時期に弘大泌尿器科に留学していたモーリックは、ダッカ市内で「弘前クリニック」の名で開業している。

- **1987**年**1**月、ダッカ大学講師の**CR AHSAN**（現教授）、弘前大学医学部に日本国費で留学。
- **1989**年**10**月、**AHSAN** 医学博士**(**弘前大学）取得。その後、ジェファーソン大学（米国）で**2**年間研究生活。その間に私もジェファーソン大学を訪問。
- **1997**年**11**月、ダッカ大学から招聘（講演）。
- **2006**年**3**月、ダッカ大学と日本人研究者との間で学術研究会を設立。
- **2009**年**9**月、日本学術会議・バングラデシュ学術科学アカデミー間で学術友好協定調印。隔年毎に相互の国で研究発表会開催。

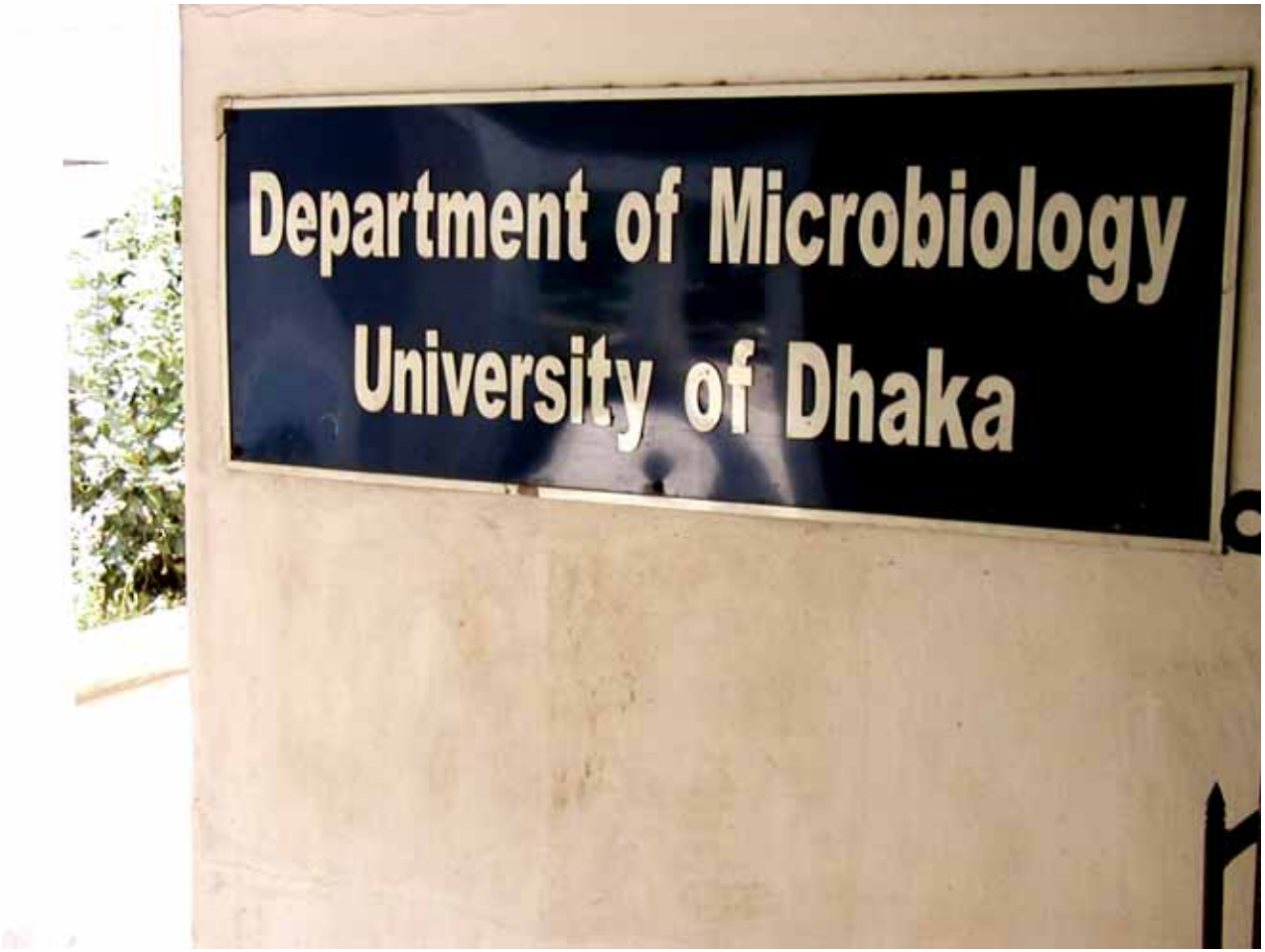
世界的な免疫学者・新作能作者　多田富雄先生の「独酌余滴」からアーサンについての記述部分を紹介する。

多田富雄東大名誉教授(NHK･TV)

「葬式の花輪のようなものが、何十となく一団となって向こうへ移動しているのだ。バングラデシュの首都ダッカの飛行場に初めて降り立ち、迎えの車で市内に入りかけた時のことである。同乗していた昔の私の学生アーサン君が言った。「リキシャですよ。幌に飾りがついている」

夕暮れ時の客を運ぶダッカ市内のリキシャ。

奈良先端科学技術大学でのダッカ大学との学術会議(2009年3月）。
バングラデシュの教授連と（右端：ダッカ大学アーサン教授）。



ダッカ大学微生物学講座の門柱

ダッカ大学の構内で写生をする小学生。

アーサン・ファミリーとの夕食会。前列左から、タヒア(長女；今年結婚)、マリファ(次女、大学生)、ジャハン(アーサンの奥さん)。

ダッカ市内の大学キャンパスで。

大学の食堂で。

ダッカ市内で。

সূর্যোদয়ের দেশে বেড়িয়ে এসেছেন আবুল খায়ের মুসলেহউদ্দিন। জাপানের অরণ্যবনানী, পাহাড়-পর্বত, ফুল-ফসল দেখেছেন কবির চোখ দিয়ে। ও দেশের মানুষ, সমাজ, ধর্ম ও ঐতিহ্যকে অনুভব করেছেন কথাশিল্পীর দৃষ্টিতে। তারপর খাড়া করেছেন এ অনবদ্য ভ্রমণ কাহিনী। গল্প-উপন্যাসের ঢংয়ে লেখা। মজার মজার সব চরিত্র। রসাল সব ঘটনা। অবিশ্বাস্য যত অভিজ্ঞতা।

পড়তে পড়তে পাঠকও ভ্রমক হয়ে যাবে।

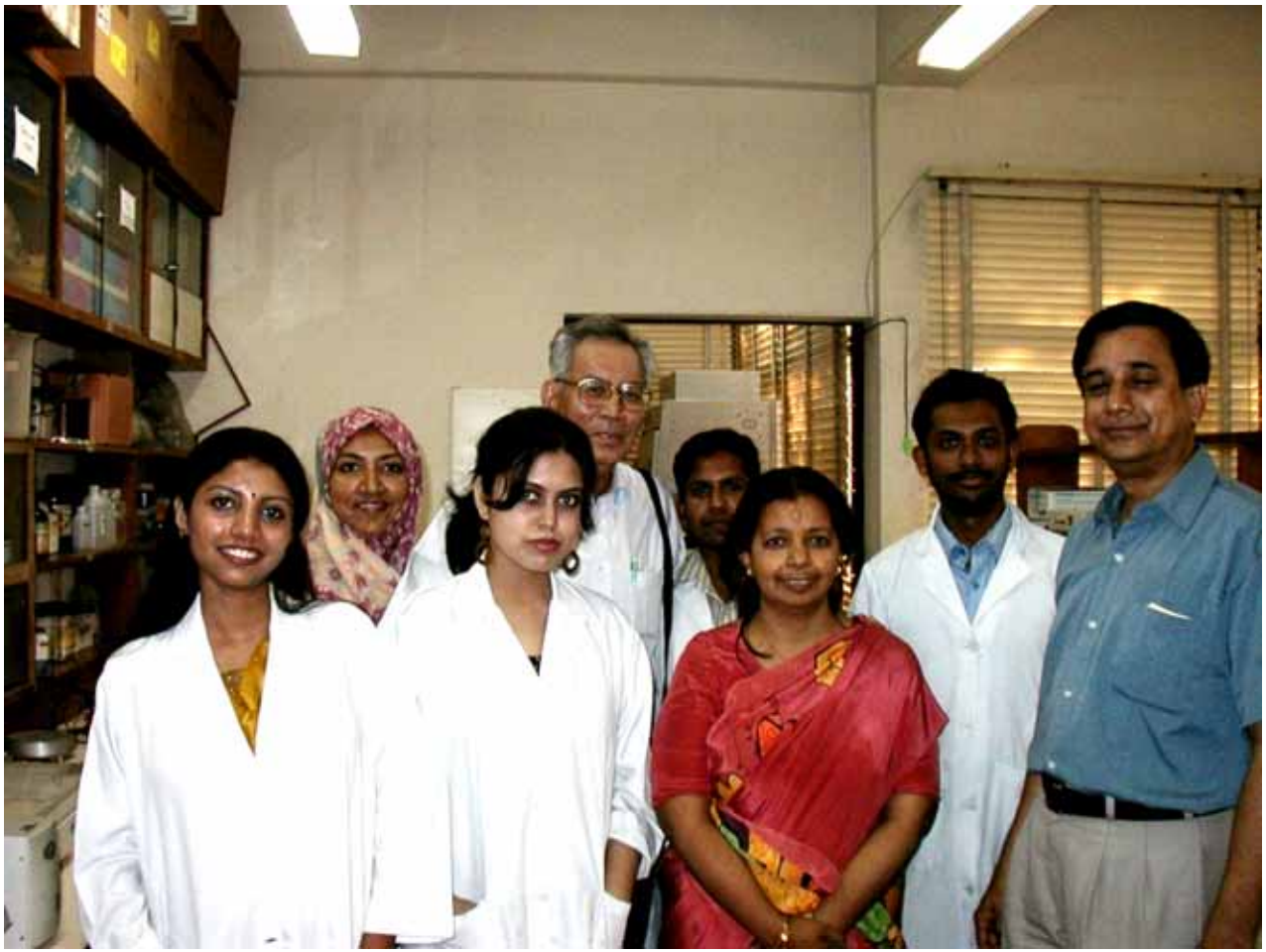
アーサンの（故）義父（元警察署長）による日本の紹介本。市内を見学したとき、数人のガードマンが付き添い初めてVIP待遇を受けたことが思い出される。　合掌。

ダッカ市内を流れるジャムナ河と沈む夕陽。

ダッカ郊外の食品会社を訪問した日本人研究者。私の右隣は会社案内をしてくれた担当者。

バングラデッシュ・日本の国際会議で挨拶するアーサン教授。

大学キャンパス内のアイスクリーム屋さん。



アーサン研究室のスタッフ。サリーの女性は英国で学位を取得。

ダッカ市内の中心街･エレファント通り。

エレファント通りの路上帽子店、装飾店？

ただ今、自力で修理中。動くようになるかどうか分かりません。

ジャムナ河での水浴びは一日の楽しみ。

水遊びを終わったリトル・ボーイ達。

食べられる植物を探す主婦。

アーサンのアパートから見える市内の風景。一日に数回、モスクからのスピーカーを通してアザーンが聞こえてくる。

わずかのお金を払ってこのボートで一日クルージングを楽しんだ。

ダッカ市内の病院の受付と患者

ボートで働く人も哲人のような風貌をしている。そして寡黙である。

大学構内で客を待つ少しくたびれたリキシャ。

バスに乗るためにはぶら下がることくらいはなんでもない。
それに外の方が涼しいし。

ダッカ大学構内にある薬用植物園。

河岸で凧揚げを楽しむ子供達。

手を振って挨拶をしてくれて。ゆっくりとした時間がいい。

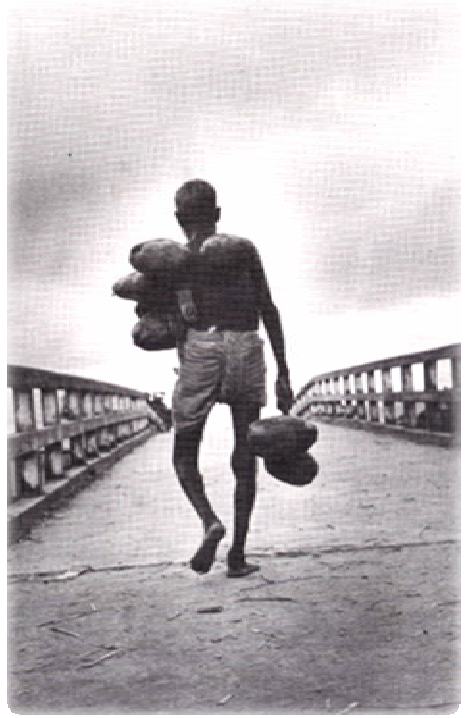
バングラデシュの案山子（？）のようですが。

バスについた模様のようなスクラッチ。自動車は動けばいいのである。

「僕は東京で働いたことがある」と声をかけてくれたダッカの若手社長。
名刺も貰いました。

路上の野采市場。生きていくために必要な談合（？）

ホテルの懐かしいハンドメイドの木製ベット。泊2000円位。
朝食は：コーヒー、卵、パン、ナム、バナナのバイキングスタイル。



昔、送られたバングラデシュの写真集より

クルージングのボートを見に集まってきた子供達。

逸見庸の「もの食う人びと」のなかの一文を紹介し、世界最貧国のバングラデシュからのレポートを終わりたい。

金曜日の夜。

私とモハメドは都心の「ダッカ・レデーズ・クラブ」という建物の前の木立の陰にかくれていた。なかから笑いさんざめきが聞こえる。結婚披露宴なのだ。

喧騒が静まった。やがて建物の裏手にウエーターが食べ残しを載せたまま机を運んできた。そこにビニール袋を手にしたサリーの女たち五人がどこからか影のように近づいた。

そして膨れた袋を提げ、一列になり、皆なぜか猫背にして、しずしずと闇に消えていった。

モハメドがささやく。

「木曜と金曜が、残飯の主な出荷日なんだ。イスラム教徒がこの両日に結婚式をするのを好むからさ」

披露宴の食べ残しが商品化するわけである。